

ライプニッツの物体論

宗 像 恵

(序)

ライプニッツの形而上学体系は、モノアの体系として知られている。モノアだけが唯一の実体であり、そしてそのモノアは精神的実体である、とされている。すなわち、我々の魂と類比的なものであり、それがもつ内的作用ないし内的性質は表象 *les perceptions* と欲求 *les appetitions* である、とされる。

しかし、それでは、彼に先行する哲学者達、デカルトやスピノザによって、あるいは異なる二種類の実体として、あるいは同一の実体の異なる二種類の属性として、精神と実在的に同等の位置を与えられていた物体は、ライプニッツの形而上学の体系において、どのような位置を与えられるのであろうか。本論文の目的は、精神的実体であるモノアの体系の中で与えられる、物体の位置を確定することである。

(一)

物体に関するライプニッツの議論においてみられる第一の特徴は、物体を精神の表象に相対的な現象であるとする、強い傾向である。デカルトについてみると、彼は物体の感覚的性質についてはライプニッツと同様に、意識に相対的な現象としたが、延長・形・運動等は、物体的実体の属性・様態として実在的である、とした。しかし、ライプニッツは、それらの性質も、やはり我々の意識に相対的な現象である、とするのである。(注1)

そればかりではなく、ライプニッツは極端な場合には、「物質的事物は表象の外では無であるだろう」(注2)、という言い方をしている。

このようなライプニッツの傾向は、自然学の対象となる物体界を、全て現象にすぎない、とするに至る。彼の或る小品の題名を借用して言うならば、自然学の目指すべきことは、実在的現象 *phaenomena realia* を想像的現象 *phaenomena imaginaria* から区別することに尽きることになる。(注3) 自然学の対象とされる物体的現象は、単なる夢のようなもの、つまり幻想 *illusion* ではない、という意味で、想像的でなく実在的であるとされるのであるが、しかしそれにしても、現象であるにすぎず、実在的世界そのものではない。ライプニッツは、感覚的世界のみならず、物理的世界をもまた、現象であるとするのである。

それでは、実在的現象とは何であるのか。いかなる理由により、物体的現象は単なる幻想から区別されて、実在的 *realis* である、実在性 *realitas* をもつ、あるいは実在的なもの *res* であると言われるのであるか。この問いを有名なライプニッツの術語を用いて言い換えると、物体的現象がよく基礎付けられた現象 *phaenomena bene fundata* とされる理由は何か、という問題である。

ライプニッツの議論をみると、この理由として二つのものが考えられる。ひとつは現象相互間にみられる秩序、つまり現象の規則性であり、他のひとつは物体的現象に力の作用がみられるという事実、である。

はじめの理由、すなわち現象の規則性という点から検討するならば、先程触れた小品、「實在的現象を想像的現象から区別する方法について」において、ライプニッツが現象の實在性を判断する規準の第一に挙げているのが、他ならぬこの現象の規則性、言い換えるならば、未来の予測可能性である。ライプニッツの言葉を引用するならば、「現象の實在性の最も有力で、しかもそれだけで十分な指標は、過去や現在の現象から未来の現象の予言に成功すること」(注4)なのである。

この予言の成功の基礎として、二つの根拠が挙げられている。ひとつは理性によるもので、「これまでに成功してきた仮説」である。他のひとつは、「これまでに観察されてきた習慣」である。(注5)このうち習慣による未来の予測は、日常生活においては重要であるとはいえ、観念の連結が単に記憶に依存しているにすぎず、論証的 *démonstratif* ではありえない。(注6) そこで現象の實在性の判定にとり、より重要であるとされるのは、もうひとつの根拠、理性による仮説である。ライプニッツは、たとえ全人生が夢にすぎず、可視的世界が想像の産物にすぎないとしても、「理性を正しく用いて」人がそれらに欺かれることがないならば、それらの現象は十分に實在的である、と言うのである。(注7)

理性を正しく用いてつくられる仮説とは、数学的自然学に他ならない。数学的自然学は、知性にのみにより知られる概念・必然的真理・永遠真理に基づき、物体現象のうちの秩序・規則性を「論証」する。(注8) しかし、必然的真理に基づき普遍的妥当性をもって論証されるとはいえ、この秩序ないし規則性は、外的物体の存在を証明する根拠とはなりえないのである。

さて、現象の實在性の根拠、現象が「よく基礎付けられた」と言われる理由の他のひとつは、現象のうちに力の作用がみられるという事実であった。そこで、このもうひとつの理由の検討の準備として、ここで、数学的自然学についてライプニッツの与えている説明を少し立ち入って調べてみたいと考える。

ライプニッツによれば、数学的学問は純粋数学と混合数学とに分かれる。(注9) 純粋数学とは幾何学と数論であり、混合数学とは純粋数学の自然への適用である。純粋数学と混合数学との対象について、ライプニッツはどのような性格付けをしているであろうか。

純粋数学、つまり幾何学と数論の対象は、それぞれ、延長と数である。これらの数学的概念は、ライプニッツによれば、精神の抽象物にすぎない。延長は「拡散されているもの」を、数は「数えられるもの」を前提するが、そうした具体的に存在するものから抽象して、ただ、可能的なものの相互の秩序・連関のみを捉えるのが、延長や数などの数学的概念である。(注10) 時間・空間も同じ抽象概念である。たとえば空間は、同時に存在しうるものの秩序と言われるが、これは、可能的な位置関係・遠近関係が一般的に考察される秩序を意味し、その際、それらの関係自体は、實在する具体的な事物の偶有性 *accidens* としてではなく、精神の抽象による全く観念的なもの

のとして捉えられるのである。(注11) この意味で時間・空間は *ens realis* (実在物) ではなく、*ens rationis* (理性の有) ないしは *res mentalis* (精神的事物)、と呼ばれている。(注12)

数学的概念を *ens rationis* とみる、このライプニッツの見方は、スピノザの見方と同じである。(注13) ただし、スピノザがそれ故に数量的自然学を退けたのに対して、ライプニッツは、数学的真理は永遠真理であると言うのである。すなわち、数学の対象そのものは観念的なものであり、何ら精神の外に実在するものではないとはいうものの、数学的真理は、必然的真理・永遠真理なのである。ライプニッツ自身の言葉を用いれば、「連続体に関する学問、すなわち、可能的なものに関する学問は、永遠真理を含む」(注14) のである。ライプニッツはこのことの根拠を、神の知性のうちに求める。神が実体、つまりモナドとその様態ばかりでなく、それら相互間の関係 *relationes* をも見る、ということに、諸々の関係、諸々の真理の実在性は存するのである。また時間や空間の実在性も、それらが個々の人間精神の現象であるだけでなく、神の現象 *phaenomena Dei* でもあるということに存する、と言われる。(注15)

さて、純粋数学が抽象的な秩序や関係に関する学問であったのに対して、その自然への適用である混合数学の対象は、延長 *extensio* でなく延長するもの *extensum* である、とされる。この混合数学が数学的自然学であることは言うまでもない。ところで、この延長と延長するものとの関係は、数と数えられるものとの関係と同じである、と言われている。すなわち、「延長」が抽象物であり実在的なもの *res* ではないのに対して、「延長するもの」、換言すれば、「物質」、「延長的物塊」は、それ自体で完全な物体 *corpus completum* であり、実在的なもの *res* なのである。(注16)

それでは、単なる延長と延長するものとのちがいはどこにあるのであろうか。この問題は、デカルトの物体論に対するライプニッツの批判に関連した問題である。周知のように、デカルトは物的実体の属性を延長とし、更にその様態として、形・位置・運動を挙げた。ライプニッツはこの説に対して、第一に、単なる延長は運動や静止に対して無差別的 *indifferens* である故に、それによって運動に対する物体の抵抗力 *resistentia*、すなわち慣性 *inertia* を説明できない、という点、(注17) そして第二に、運動力 *vis motrix* を除いて運動を単なる位置の変化と捉えるなら、充滿した延長体において等しいものの交替が行われるだけであり、運動の主体が決定できない、という点(注18)を挙げて、デカルトに反対したのであった。

ライプニッツは、物体として、単なる延長ではなく、抵抗力と運動力(ライプニッツはこれらをそれぞれ受動的力 *vis passiva* と能動的力 *vis activa* と呼んでいる)(注19)を備えその両者から構成される、「完全な物体」を考えなければならない、と主張するのである。単なる延長だけからは、結局、物的現象における一切の多様性、また一切の変化は説明できずに終わるであろう。(注20) 延長が帰される具体的事物のうちには、延長の他に能動と受動 *actio et passio* を認めなければならない。これがデカルトに対するライプニッツの批判である。延長するものとは、その両者を備えた延長的物体のことである。この点についてライプニッツは、前

に触れた、延長が前提する「拡散されているもの」とは、τὸ δυνάμει κίνησιςつまり能動受動の原理 *principium agendi et patiendi* に他ならない、という言い方をしている。(注21)

さて以上から、自然学の対象である延長的物体は、力を備えた物体である。ところが、物体的現象に力の作用がみられるというこの事実こそが、問題となっている、現象が実在的であるとされるための第二番目の理由・根拠に他ならない。力の作用は、何故、現象が実在的であるとされることの根拠となるのであろうか。

デカルトの自然学においては、物体間の差異・区別は各物体に付与される運動の差異・区別による、とされた。しかし既に述べたように、ライプニッツは、運動は単なる位置の変化とみられるならその主体さえ決定されえないものである、と主張する。そこで、物体間の差異の原理として、相対的な位置の変化以上の絶対的な何かが求められるのであり、その絶対的な何かが力に他ならないとされるのである。物体的現象のうちに認められる一切の差異の原理として、物体的現象のうちに見出される絶対的なもの、それが力である。力は運動の直接的原因であり、運動の中に認められる唯一の実在的なものである。(注22) この意味で、力は物体的現象が実在的であると言われうる根拠のひとつに数え入れられる、と言えよう。

しかし、力の作用が、現象が実在的であることの根拠とされる理由は、これだけにはとどまらない。

現象が実在的である、ということは、現象がよく基礎付けられている *bene fundata*、と言い換えられた。そこで、この「よく基礎付けられている」という言葉には、現象の実在性の根拠が二つあることに従って、二つの異なる意味がある。第一には、現象の実在性の第一番目の根拠に対応して、よく基礎付けられているとは現象が規則立っている *regulata* ことと同義である。(注23) しかしまた、*bene fundata* という言葉は、現象が *fundata in rebus* である(事物のうちに基礎をもつ)ことをも意味する。(注24) ライプニッツの体系で真に実在する事物はモナドだけであるから、これは結局、*fundata in monadibus* (モナドのうちに基礎をもつ)ということであり、ライプニッツ自身がこの表現を用いている。(注25) これはどういう意味かというと、現象界にみられる力の作用がその基礎を実在界、すなわちモナドの世界のうちに起している、という意味である、と解釈できよう。そうすると、物体的現象にみられる力の作用が実在的であるとされ、それに従って物体的現象が実在的であるとされる、より根本的な根拠は、物体的現象が純粋に観念的なものであるのではなくその奥に実在の世界を基礎としてもつ、ということが、力の作用が存在することによって示されることにある、と結論されるであろう。

(二)

ところでライプニッツはこの力について、「運動と呼ばれる状態の中にある実在的なところは……物体的実体由来する」(注26)、あるいは、「物体的実体の中にある、運動の原因である力」(注27)、と言っている。すなわち、ライプニッツは、単なる現象ではない物体的実体 *substantia corporea* の存在を、はっきりと認めるのである。ライプニッツの体系において認め

られる物的実体とは何であろうか。

ライプニッツは「実体とは作用が可能な存在である」と言う。(注28) この作用の原理が力であり、そして力は「実体を構成するもの」(注29)である。ライプニッツは明確に、力は「実体そのものをその基体とする属性」である、とも言っている。(注30) しかしながら、ここで言われる力の主体は、現象において力の主体として認められる物体のことを意味しているのではない、ということに注意しなければならない。

ライプニッツは力を二種類に分けるのである。原始的力 *vis primitiva* と派生的力 *vis derivativa* である。(注31) 物的現象において認められる力は、派生的力にすぎない。物的現象における能動的力、すなわち運動力・作用力と、受動的力である抵抗力とは、ライプニッツによれば、偶有的かつ可変的なものである。本質的かつ永続的なものを前提する様態 *modificationes* でしかないのである。(注32) 派生的力は原始的力の様態にすぎない。そして、両者はそれぞれ現象界と実在界に属せしめられ、全く対照的な特性をもつとされる。またそれによって、原始的力の主体は実在界に、派生的力の主体は現象界に属せしめられる、全く別種のものとされるのである。

まず、原始的力と派生的力をもつ特性が対照的であるとは、原始的力の作用が内的であるのに対して派生的力の作用が外的である、ということである。実在界においては、力の作用は内的であり実体相互間の直接的作用はない（つまりモナドには窓がない）、とされる。ところが現象界においては、物体相互間の衝突・衝撃、すなわち外的相互作用がみられるのである。したがってまた、変化の生じる原因も、実在界と現象界とでは対照的であることになる。モナドはその本質として変化へ向かう内的傾向をもつとされ、モナドに生じる変化は全てモナドの内部から自然に生じる、とされる。ところが現象界においては、全ての新しい変化は、或る一定の運動法則に従う物体間の衝突から、すなわち外的作用の結果として生じるのである。たとえば円運動を行う物体は、それ自体としては慣性に従い接線方向に向かうが、他の物体に絶え間なく押されることによって円運動をする、と言われている。(注33)

つぎに、原始的力と派生的力の主体について何が言われうるか、派生的力の主体からみてみよう。

現象界の説明は人間精神による「抽象」を受け入れる。現象界の説明には人間精神による抽象は、有効であり有用であるばかりが必須である、と言われる。たとえば、物体の運動法則は数学的に記述されるが、その数学は、前にみたように関係一般に関する抽象的学問であり、その証明の道具として、「無限小量」という全くの虚構すら含むものである。(注34) 時間・空間の概念にしても、人間精神が諸現象間に認められる一致・秩序から抽象して形成した概念であった。ところがまた、ライプニッツは、「現象において、物魂の各部分に何を帰すべきか決定することができるのは、このこと〔抽象〕によるのである」(注35)、と言う。この言葉は、現象における派生的力の主体決定には恣意的な面が含まれる、と解釈しうるであろう。このような恣意的な決定に依存する主体が実体であるはずがない。物的実体と言われるのは、現象界において力の主体と

なる物体のことではないのである。

自然学の対象となる延長の物体は、作用の原理、力を含むとはいえ実体ではなく、あくまで現象にすぎない。ライブニッツは自然学の対象となるこの延長の物体を、実体と区別し、また、純粹に観念的なものであり、人間精神の形成したもの *res mentalis* である延長とも区別し、その中間的な存在として、半実体 *semisubstantia*、準実体 *quasisubstantia* という名称を与えている。(注36)

物体的実体とは、現象界における派生的力の主体ではなく、実在界における原始的力の主体である。ライブニッツは、有限実体、すなわち神以外の実体は能動的原理と受動的原理の結合によって構成される、とするのであるが、様態的なものにすぎない能動的力と受動的力、すなわち運動力と抵抗力との結合によっては、実体は構成されえない。現象界におけるそれら偶有的・可変的力の前提となるべき本質的・永続的力の主体として、実在界における物体的実体が要請されねばならない。すなわち、それら様態の源泉 *fons* となるべき実体的なもの(注37)として、原始的な能動的受動的力の主体として、物体的実体は要請されるのである。

それでは、原始的な能動的受動的力とは一体何であろうか。ライブニッツはアルノー宛書簡において、物体的実体が要請されるもうひとつの理由を挙げている。ところが後にみるように、このアルノー宛書簡で問題とされている、物体的実体の要請の理由と、上に述べた物体的実体の要請の理由(つまり原始的力の主体としての要請の理由)とは、実は同一に帰するとされるのであるから、アルノー宛書簡での議論の検討によって、原始的力の本性が何であるか、解明されるであろう。争点は、実体は実体である限り真の統一 *une véritable unité* をもたねばならない、という点である。(注38)

ライブニッツは、偶有性による一 *unum per accidens* とそれ自身による一 *unum per se* とを区別する。偶有性による一は思惟による統一 *une unité de pensée* でしかなく、何を統一体とするかは任意である。そこで偶有性による一しかないところには、これこそ真の存在である、と言いうるようなものは見出されない。それ自身による一、真の統一をもつものがあって、はじめて真の存在が見出されるのである。したがって、物体のうちに真の統一を備えたものが何もないならば、物体は単なる「規則立った夢」のようなものであることになってしまう。この場合には可視的世界のうちに人間他には実体的なものが何もないことになる。(人間だけは例外であり、その精神が真の統一をもつことが自己反省によって知られており、その身体が有機的機械としていかに諸部分に分けられようとも、精神の与える真の統一を備えていることが知られている。)

ただし、物体のうちに真の統一を備えた存在がなければならない、というこの議論は、物体は真の統一を備えた存在から合成 *componi* されていなければならない、と言うのではなく、ただ、そうした存在を基礎にもちそこから結果 *resultare* するのでなければならない、と言うのである。ライブニッツはそうした存在が物体的現象の部分 *partes* でなく基礎 *fundamenta* としてある必要を言うのである。(注39)

さて、それでは真の統一は何によって得られるのであろうか。ライブニッツはそれを、「実体的形相」、「精神に類比的なエンテレケイア」、あるいは「生命的原理 *un principe vital*」と呼んでいるが、一語で言えば精神的生命的原理である。(注40) またこれに付加えて、ライブニッツは、人間の場合に精神が形相であり身体が質料となってひとつの実体が構成されるのと同じ仕方で、物的実体も構成される、と言う。(注41) これは前に触れた、有限実体においては能動的原理と受動的原理の結合によって完全な実体が構成される、という議論であるが、ここでは両原理の結合が、精神的生命的原理と有機的機械（つまり身体）との結合として語られているのである。

さて、物体が単なる現象ではなく実体であるためには、真の統一をもつ存在が要請された。そしてその真の統一の原理とは、精神的生命的原理であった。ところがライブニッツは、作用の根本原理である原始的力とこの精神的生命的原理は同一である、と言う。「作用の源泉と統一の源泉は同一である」、とライブニッツは明言している。(注42) 原始的力とは第一エンテレケイアに他ならず、精神的生命的原理に他ならないのである。あるいはより正確に言うならば、原始的能動の力が第一エンテレケイア、精神的生命的原理であり、原始的受動的力は、実体の不完全性の原理である第一質料 *materia prima* (注43)、すなわち身体なのである。

結局、原始的力の主体であり、真の統一をもつ存在である物的実体とは、有機的生命体である。ライブニッツは人間以外の生物、すなわち、動物・植物・更に下等な微生物に至るまでを全て、物的実体として総称しているように思われる。しかもライブニッツは、更に進んで、無機的物体とみえるものも実は無数の有機的生命体で充滿している、と主張するのである。(注44) 人間そして種々の物的実体の身体は微生物で充滿しており、そしてその各々の微生物の身体もまた更に小さな微生物で充滿しており、以下無限に続く、というように、全自然は至る所、無数の生命体で充滿している、とライブニッツはみるのである。

デカルトは有限実体（つまり神以外の実体）を、精神的実体と物的実体との二種類に区別した。しかしライブニッツは、デカルトが実体であるとした延長の物体を全て現象にすぎないとし、しかも、そのように現象としては無機的延長とみえるものが実体としては無数の精神的生命的実体であるとした。そしてそれらの精神的生命的実体に物的実体という名を与えたのである。

さて、それではライブニッツの言う物的実体と自然の真のアトム、事物の元素 *les éléments des choses* と言われるモノイドとの関係は、いかなるものであろうか。結論を言うならば、モノイドが単純実体 *substantia simplex* であるのに対して、物的実体は多数のモノイド・単純実体から成る合成実体 *substantia composita* である。多数のモノイドが支配的 *monas dominatrix* によって統一されて合成実体になる。(注45) そして合成実体は、その支配的モノイド・統一の原理 *le principe de son unicité* の種類に従って、人間（人間は物的実体と区別されるべきであるが合成実体ではある）・動物・植物・単なる生命体へと階層付けられるのである。(注46)

(注)

略号一覧；

G. *Die philosophischen Schriften von Gottfried Wilhelm Leibniz*, hrsg. von C. I. Gerhardt.

G. M. *Leibnizens mathematische Schriften*, hrsg. von C. I. Gerhardt.

(一)

- (注1) e. g. G. II. p. 119, 「……形は物体を構成するものであるところか、思惟の外では、完全に実在的で確定された性質ですらない。……私は同じことを、大きさや運動について言うことができる。つまり、これらの性質ないし述語は、色や音と同じように、現象的性質を帯びている。」 cf. G. IV. p. 436.
- (注2) G. III. p. 623.
- (注3) G. VII. pp. 319-322, 「実在的現象を想像的現象から区別する方法について」
- (注4) G. VII. p. 320.
- (注5) Ibid.
- (注6) e. g. G. VI. pp. 600-601, 「動物の表象には、理性と似た所のある或るつながりが存在する。しかしそのつながりは、諸事実ないし諸結果の記憶に基づくにすぎず、原因の認識に基づくのでは全くない。……人間にしても、経験的である限りは、つまりその行為の大部分においては、動物と同じように行為しているにすぎない。……しかるに真の理性の働き *raisonnement* は、必然的真理ないし永遠真理に、たとえば、観念間の不可疑的な連結ないし不動の帰結関係をなす、論理学、数、幾何学の真理に、依存している。」 G. VI. p. 501, 「何かより高度な、知性のみが供給しうるものが、想像力や感覚を助けにくるのでなければ、数学的諸学問は全く論証的でなく、単なる帰納や観察から成ることになってしまう、というのは正しい。帰納や観察によっては、我々は決して、数学的諸学問のうちに見出される諸真理の完全な普遍性を、確信することができないであろう。」 cf. G. VI. p. 505, p. 611.
- (注7) e. g. G. VII. p. 320, 「実際、たとえ全人生が夢にすぎず、可視的な世界が想像の産物にすぎない、と言われようとも、もしも理性を正しく用いて、この夢ないし想像の産物に欺かれることが決してないならば、私はこの夢ないし想像の産物は十分に実在的である、と言うであろう。」 G. VI. p. 404, 「我々の表象が、相互に、そしてまた過去に我々のもった他の表象と、よくつながっており、数学の規則や他の理性の真理がそれらに妥当するようであるかどうか、よく考察する必要がある。もしそうになっているなら、それらの表象は実在的とみなさなければならない。」 cf. G. III. p. 567, G. IV. p. 439.
- (注8) G. VI. p. 501. cf. (注6)
- (注9) Ibid. 「想像力に従属する、これらの明晰判明な観念が、数学的学問の対象である。数学的学問とはすなわち、数論と幾何学（これが純粋数学である）と、それら諸学問の自然への適用（これが混合数学をなす）とである。」
- (注10) e. g. G. II. p. 249, 「ひととは普通、想像力を満足させることに甘んじ、理性については配慮しない。……すなわち、不完全で抽象的な概念、つまり数学的概念しか用

いていない。これらの概念は、思惟が支えているのであって、そのままの形では自然のうちには見出されないものなのである。」 cf. G. II. pp. 169-170, p. 195, p. 241, pp. 268-269.

- (注11) e. g. G. VII. p. 401, 「位置ないし空間と呼ばれるものは、精神がそのうちに諸関係の適用を考える、或る秩序を含んだ、観念的なものでしかありえない。……この第三の意味での関係は、確かに基体から離れてあり、実体でも属性でもない故に純粹に観念的なものでなければならない、ただその考察が有用なのである、と言うべきである。」 cf. G. II. p. 183, p. 249, p. 253, p. 268, p. 450, IV. p. 568.
- (注12) G. II. p. 183, p. 268.
- (注13) 拙稿「スピノザの知識論」、『理想』4月号、1979年、pp. 123-124を参照。
- (注14) G. II. p. 282, cf. G. II. p. 268, 「数学的对象は、数や時間の特質の場合と同じように、その無数の特質を極めて明証的に理解しうる、ということは私も認めるが、それら自体は、事物の可能性ならびに永遠真理とに属する、秩序ないし関係であるにすぎず、ただ、そうしたものである故に、また現実存在するものにも適用されることになるのである。」他に、G. IV. pp. 491-492, G. VII. p. 564も参照。
- (注15) G. II. p. 438. cf. G. VII. p. 564, 「連続性は、他の全ての真理と同じように、神の知性の対象であり、その光が我々の知性の上にも及んでいるのである。」
- (注16) G. II. p. 171, p. 195, p. 268.
- (注17) G. II. p. 170, 「物質のうちには自己の状態を保とうとする力がある、としなさい。確実にこの力は、延長だけから導き出されることが決してできない。」
- (注18) e. g. G. IV. p. 444, 「多くの物体が互いにその位置を変えるとき、その位置の変化を考察するだけでは、運動ないし静止が、それらの物体のうちのどれに帰されるべきかを、決定することはできない。」 cf. G. II. p. 98, p. 133.
- (注19) G. M. VI. pp. 236-237.
- (注20) e. g. G. II. pp. 226-227, 「もし普通に行われているように、物体は延長以外のものを何も含まない、と言われるならば、……物体のうちに有る多様がいかんして生じるかが、どのようにしても説明されえなくなる。」 cf. G. II. p. 249, p. 257.
- (注21) e. g. G. II. p. 269, 「拡散され、反復され、連続すると想定されたこの本性は、物理的物体を構成するものであり、そしてそれは、能動受動の原理以外の原理のうちには見出されえない。」 cf. G. II. p. 241, G. IV. p. 499.
- (注22) e. g. G. II. p. 133, 「運動はそれ自体として、力と切り離されて考えられると、何か相対的なものであるにすぎない。……しかし力は、何か実在的で絶対的なものである。」 cf. G. II. p. 91, p. 98, G. IV. p. 444.
- (注23) G. II. p. 251. cf. (注7)
- (注24) G. II. p. 268.
- (注25) G. II. p. 435.

(二)

- (注26) G. II. p. 91.
- (注27) G. II. p. 98.

- (注28) G. VI. p. 598.
- (注29) G. IV. p. 472.
- (注30) G. II. p. 170.
- (注31) G. M. VI. pp. 236-237.
- (注32) e. g. G. II. p. 270, 「偶有的ないし可变的なものは全て、本質的ないし永続的な何かの様態でなければならない。」 G. II. p. 504, 「実体的なものは、様態の源泉である、と定義されうる。」 G. II. p. 262, 「原始的力は、系列の法則のようなものであり、派生的力は、系列中の或る項を指定する、確定値のようなものである」 cf. G. II. p. 171, p. 251, p. 257.
- (注33) この段落の議論は、G. II. pp. 251-253 による。
- (注34) e. g. G. VI. p. 629, 「無限小計算は、数学を自然学に適用することが問題のときに有用である。しかし私は、それによって事物の本性の説明をする、と主張するつもりはない。というのは、私は無限小量を、有用な虚構と考えるからである。」 cf. G. VI. p. 90, G. M. VI. p. 238.
- (注35) G. II. p. 253. (ただし、2行目の quo を、Loemker : *G. W. Leibniz, Philosophical Papers and Letters*, p. 531 に従って読む。〔 〕内は筆者の補足。)
- (注36) G. II. pp. 257-258, p. 504.
- (注37) G. II. p. 504. cf. (注32)
- (注38) 「真の統一」を廻る次段落の議論は、G. II. p. 77, pp. 96-97, pp. 119-120 による。
- (注39) G. II. p. 268, 「正確に言うと、物質は、構成的一から合成されているのではなく、それらから結果するのである。……実体的一は、現象の部分ではなく、基礎なのである。」
- (注40) e. g. G. II. pp. 118-121.
- (注41) G. II. p. 120, 「我々の身体が我々の実体の質料であり、精神がその形相であるように、他の物的実体についても事情は同じである、と言いうる。」
- (注42) G. II. p. 249.
- (注43) e. g. G. II. p. 252, 「モノドつまり完全な単純実体において、エンテレキアと私が結びつけるのは、有機的身体をなす全物塊に関係する、原始的受動的力に他ならない。……そこで私は以下の区別をする。(1)原始的エンテレキアつまり精神、(2)第一質料つまり原始的受動的力、(3)上の二つから成る完全なモノド……である。」 cf. G. II. pp. 119-120, pp. 324-325.
- (注44) e. g. G. II. p. 118, 「物質は際限なく分割可能であるが、その中に、精神を与えられた物体、あるいは少なくとも原始的エンテレキアを付与された物体、ないしは(生命という名をこのように広く用いることが許されるなら)、生命的原理を付与された物体、換言すれば物的実体が、含まれていないほどに小さな部分を、物質に帰することはできない。物的実体とは、それは生きていて、一般的にその全てについて言うことができるようなものである。」 cf. G. VI. pp. 618-619.
- (注45) e. g. G. VI. p. 598, 「実体は単純であるか、合成されているかである。単純実体とは、部分をもたない実体である。合成実体とは、単純実体つまりモノドの集合であ

る。」 Ibid, pp. 598-599, 「合成実体（たとえば動物のような）の中心となり、その統一性の原理となる、各々の単純実体つまり個々のモノドは、無数の他のモノドから合成された物塊によって取り囲まれている。この物塊が、中心的モノドの身体を構成する。」

- (注46) e. g. G. W. pp. 599-600, 「これが知覚、つまり記憶に伴われた表象にまで達することがありうる。……こういう生命体が動物と呼ばれ、同様に、そのモノドは精神と呼ばれる。そしてこの精神が理性にまで高まると、それは何かより崇高なものとなり、理性的精神に数え入れられるようになる。」 cf. (注6)

追 記

本論文は、関西哲学会第31回大会（昭和53年）における研究報告の発表原稿に、加筆訂正したものである。なお、特に益を受けた参考文献を、以下に挙げる。

C. D. Broad, *Leibniz, an Introduction*, Cambridge University Press, 1975.

R. MacRae, *Leibniz : Perception, Apperception, and Thought*, University of Toronto Press, 1976.

山 本 信 , 『ライプニッツ哲学研究』, 東京大学出版会, 1975 (初版1953)。

〔 哲 学 助 手 〕